HITOKOMART No.7

篠原ユキオ

1948年　東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
（公社）日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

不安定な磁場 その後

この作品は2016年の参議院選挙後に描いたものだ。現政権のダメさや問題点をいくら騒ぎ立てていても最終的には多くの国民は保守を選ぶのだ。という想いをバランスの悪い国会議事堂の姿にイメージして描いたのだった。
あれから5年が経った。
今年の衆院選の結果を見るとそのカタチはあまり変わっていないように見える。
相変わらず政治に興味を持たない若者たちと頼りない野党のイメージも変わらない。
近年、地球の磁場が変化してきて千年後には反転するということが言われているが、日本の政治を動かす力が反転するとしてもそれはまだまだ先のように思える。

F-30号

外の世界と…

『書を捨てよ町に出よう』は
１９７０年代の故・寺山修司氏
の著作のフレーズだが、若い頃
僕もこの言葉からエネルギーを
もらったものだ。
この2年間はコロナのせいで誰
もが自宅生活が中心となり、町
に出られない生活を強いられる
日々が続いた。
しかし『書』を求める人がそれ
で多くなったわけではない。

私も加齢とともに小さな文字を
追う事が苦痛になってきて『書』
からは縁遠い生活になりもっぱ
らパソコンやスマホの画面と向
き合う事が多くなった。
そこで出会うのは知らず知らず
のうちに個々の嗜好に沿ってチ
ョイスされた玉石入り混じった
膨大な情報である。
ややもすると自分の目の前に見
えるものだけがすべてであるよ

うな錯覚の中に陥ってしまう危
険性をはらんでいる。
コロナは人の身体を蝕みながら
人の心も多くの人間関係も破壊
していった。
寺山氏がご存命ならきっと『ス
マホを捨てよ町に出よう』と言
うのではないかと思うのだが、
一概にそれがベストと言い切れ
ない危うさも感じる。

ビシッ！！　A-3

F-20号

A-3

迷 彩

迷彩服は本来、周りの環境に適合させて自分の存在を隠すための戦闘服だ。
日本ではグリーン系の濁色を組み合わせたものが多く見られるが、あれは森の中仕様で、当然のことだが雪山や砂漠地帯では別の色合いとなる。
そう考えると東京の街中での迷彩服姿はやたら目立つわけで、この場合は自分をアピールしたい人が着ているのだと言える。
それは、実は一見平和に見えるごく普通の風景の中に、想像もつかないような狂気が目立たない姿をして潜んでいる事を教えている。

ポタ ポタ

台所の水道の蛇口のパッキンが劣化して、ほんの少しだが水漏れをするようになり、夜中には静かな中で聞こえてくるポタポタ音が耳について耐えきれず新しい蛇口を買って来て交換した事がある。
一定の間隔を開けて落ち続ける水滴の音は古家の雨漏りも同じく決して心地良いものでは無いが、点滴のポタポタはちょっと違う。
幸いなことに私自身は今まで入院の経験も点滴の経験もないのだが、点滴のその一滴一滴が命を守るエネルギーを体内に送り込んでいるのだということを考えるだけで、病床にいる者の心を落ち着けてくれるようだ。
それは眺めている者の目の中でも、ポタポタと落ちる音を感じさせ、眠れない時の羊の数を数えるのに似ているようにも見える。

F-50号

雨漏り

F-30号

招き大仏

大仏と招き猫のツーショットである。
干支の十二支から外されてしまった猫との相性はあまり良く無いのかもしれない。
人が幸運や金運を追い求める意識はまさに限りない人間の欲望その物であり、あらゆる煩悩からの解脱を目指す仏教の教えとは相反するようにも思うのだが、二つを並べてみると面白い情景になった
勿論、識者の目からすれば、単に手招きするだけの猫とは異なって、仏像の手の形やその表現（印相）には様々な意味あいがあり、悪魔を追い払ったり迷いを立ち切ったりなど多様な表現がある。
それでもお寺さんは、忙繁時は猫の手を借りたい時もあるだろうし、参拝者を沢山招く猫も置きたいのでは…と、漫画家の頭には浮ぶのである。